

応援におけるノリと近代：沖縄の高校野球を中心に：共同研究：応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌

著者	丹羽 典生
雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	16-17
発行年	2019-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009405

応援におけるノリと近代 ——沖縄の高校野球を中心に

文
丹羽典生

共同研究 ● 応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌(2015-2018年度)

応援と近代

明治時代に近代的な事物として導入されたスポーツや音楽に関する身体的実践は、学校・軍隊・政府など公的な制度を通じて日本各地に広がっていったということが、近年の研究においてしばしば指摘されている。それに比べてみると、応援はどのようなであろうか。

応援という行為は、多くの場合スポーツの行われている場で、楽器などの演奏を伴いつつ行われている。その意味で、そうした近代的な諸制度との関係のもと再編され、行われていたと考えられる。しかし同時に、応援はスポーツそれ自体ではなく、もちろん演奏でもない。応援する人も、スポーツ選手ではなく、演奏者でもない。あるものに付随した、文字通り周辺的な位置づけにあるといえる。

このように整理してみると、応援するという行為は、スポーツや音楽がそうであるような近代的な営為とは少し異なる位相にあると考えられる。応援は、スポーツ選手や演奏者ではなく、彼らを視聴・鑑賞する一般の人々によって担われているからである。また応援には、選手や観客の感情を盛り上げたり、とくに後者の感情の発現を統制したりする側面がある。そのため、彼らを動機づけることが可能な、応援の担い手に身体化されている前近代とも地続きの要素が関係してくることが多分にあると思われる。平たい言葉でいえば、人々をうまくのせることが重要になる。

応援パフォーマンスを見たときに感じる均質性と多様性の根源は、案外そのあたりにあると考えている。別言すると、たとえば日本の応援という行為や応援団の組織の特性には、学校制度の受容に伴う身体文化の変容という近代のなかで一様に広がっていく側面だけではない。人々の身体の共振が可能となるような過去との連続的な、場合によっては土着のローカルに根づいていた身体的実践との連続性などが、ことに応援の草創期においては関わっていると思われるのだ。

民俗学者の萩原秀三郎が「祭りの日に限って、集まった群衆の間で悪口を言いあう習俗」である「悪態祭」に関する辞書の項目の末尾で、「スポーツ選手へのひやかしゃ、プロ・レスリングの野次なども民俗的にはこの流れをひくものであるか」(萩原 1972: 6)と、疑問形のかたちながらも追記しているのも、その間の事情に関わるのではなからうか。

さらに思い返せば、社会人野球のスタジアムでは、地域色を取り入れた応援合戦が繰り広げられていた(日本野球連盟 1990)。応援は、試合とは別に競われるイベントとして組織されている。あるいは、高校や大学応援団の組織においても地域的な特色が言及されるのを見聞するにつけ、応援における近代的な層とそれ以外の層との関係を分析したいと考えていた。

高校野球・沖縄・応援

具体的には沖縄における高校野球の応援が、研究を始めた当初より気になっていた。沖縄という地域における高校野球の盛

り上がりについては、かねがね耳にしていたからである。短期間ながら沖縄に何度か滞在した際にも、田舎のコンビニの棚にまで並ぶ高校野球関係のローカル出版の充実ぶりに筆者は目を奪われていた。

それだけではなく、かつて応援の場にエイサーを持ち込もうとした応援団が禁止を言い渡された事件や、高校野球の沖縄チームでは定番の「ハイサイおじさん」の歌詞の内容にクレームが付けられた事件など、応援界限にまつわる出来事をそこかしこで耳にしていたからでもある。

沖縄の高校野球の盛り上がりやこだわりについては、さまざまな研究やローカル出版の刊行物などからも、その所以をうかがい知れる。たとえば、第二次世界大戦後のアメリカの占領下に置かれた本土との分断の時代に、検疫の問題から沖縄の甲子園児が甲子園の土を持って帰ることができなかったエピソードは定番として語り継がれている。それ以外にも沖縄県民にあったとされる本土並みという劣等感の克服やアメリカ占領時代の本土復帰への願いなどが、沖縄勢の高校野球における活躍と躍進とに重ねられ、大げさに言えば沖縄県人の日本における位置づけを象徴するような話題となっていたというわけである。

また沖縄の応援パフォーマンスの特徴も興味深い。実際、沖縄勢の試合での応援は独特であると語られることがある。あふれんばかりの声援を飛ばしている観客の姿、スタジアムに鳴り響く指笛の音や試合の進展に応じて客席を盛り上げる「ハイサイおじさん」の音楽などは、野球観戦が趣味でない人もどこかで目にしたり、耳にしたりしたことがあるのではないだろうか。

応援の沖縄化へ

ところで高校野球はその前身を含めると1915年から始まっているが、こうした野球の舞台を彩る沖縄独特の応援がより鮮明になったのは、さほど古いことではないようである。さまざまな資料を検討してみると、それには関西在住の2人の沖縄県人の活躍が関わっていたことが見えてくる。

現在のような組織的な応援の形態の萌芽が見られるようになるのは、1960年代はじめのことと思われる。高校野球の熱狂的



甲子園ボウル2018(対:早稲田大学)における関西学院大学応援団総部吹奏楽部の応援風景(阪神甲子園球場、2018年12月16日、砂岡真典撮影)。

なファンである大阪在住の沖縄二世の男性の活躍を抜きに語ることはできない。沖縄出身の安仁屋宗八選手が出場していた1962年の夏の甲子園の観戦に出かけた彼は、「父親と応援に行った時、あまりにスタンドが寂しかった。同年代の球児のために何かしたい」という感想を持ったという(「沖縄タイムス」夕刊1998年6月9日: 5)。

当時の彼の応援スタイルは、三三七拍子、空手の演武がなされていたと同じ記事では言及されている。いわば日本の学校にみられる典型的な応援団スタイルである。沖縄勢を応援したいという個人的な思いがあり、それに呼応する一群の人々が存在した。一方で、応援パフォーマンスとして実体化される段階ではいわゆる日本人の応援団スタイルが採用されていたわけである。

このスタイルの特徴は、関西には沖縄県人が相当数存在するとはいえ、沖縄諸島から遠く離れた甲子園という場で高校野球が行われ、さらに応援の中心的な担い手が関西を基盤とする沖縄二世であることを考えると、それほど驚きはなし。

音楽の方はどうか。応援の中に沖縄の音楽が導入されたのはもうしばらく後のことらしい。こちらも子供のころ関西に引っ越してきたもう一人の沖縄県人が重要な役割を果たしている。彼は、関西地区の中学高校で音楽の教師を務めていた人物であるが、県人会より沖縄勢の応援を依頼されたことから、学校の吹奏楽部を引き連れて応援活動に参加するようになる。当時は、「沖縄から甲子園まで吹奏楽部が応援に来るには、膨大な遠征費」が必要となっていた(梅津2016: 82)ことも、関西在住で学校勤めの彼が関わることになった背景にある。

「ハイサイおじさん」の楽曲が使用され始めるのも、沖縄チームの躍進が見られた時期のことであった。1970年代後半からは、豊見城高等学校や興南高等学校が連続して準々決勝に進出するなど、高校野球の全国大会において沖縄県勢の存在感がいやがおうにもましてくる。1990年の夏の大会においては、沖縄水産高等学校がついに県勢初の決勝進出を果たすことになった。

スタジアムにおける吹奏楽での応援を担当していた上記の人物は、以下のように証言している。「『ハイサイおじさん』は、沖縄らしい楽曲をと思い、86年ころから使い始めました。沖縄県民なら誰もが知っている曲ですし、とても盛り上がる」(梅津2016: 84)。

こうして応援における沖縄らしさがますます進展したと考えられる。やや長くなるが、本稿の論旨と関わり興味深いので、同じく発言を引用したい。

ゆったりした民謡などは、応援のノリにあわないので、リクエストがあってもやりません。応援は自己満足になったらあかん。沖縄代表のアルプススタンドは、観客こそたくさんいますが、基本的に寄せ集め。保護者や野球部員も全員が来られるわけではなく、沖縄出身者や県人会のほか、…一般の人も多いので、知らない曲をやっても誰も声をしてくれません(梅津2016: 85)。

彼の発言からは、慣習によってローカル社会の人々に身体化されたリズムを意識しつつ(民謡への言及がこれのさいたものであろう)、あわせて応援という場のノリにも配慮していること、そうした感覚のもとで、特定の応援のパフォーマンスと演奏が選択されていることが見て取れよう。演奏で使われている

音楽の種類は近代以降に一般に広がっていったことである。一方でそれと重ね合わせられている応援という行為は、また別の位相と関わっていることが見えてこないだろうか。

ノリを方向付ける

応援という領域を人間の集団が相対立する場における感情の動員に関わるものとして広くとらえてみよう。すると応援は、ある人物なり組

織なりを軸として、周りにいる人びとが味方を励ましたり、相手や味方の失敗を野次ったりするという行為が生じる場と考えられる。別言すると、いわば人々のノリを組織化し、方向づけることが重要となってくるのだ。

応援パフォーマンスの歴史を見ていくと、拍手や声を張り上げるかたちから、吹奏楽を利用するスタイルに急速に変化したことがわかる。より大勢の観客のノリを組織化することを目指す応援の特徴を考えると、こうした変化はもっともなことではないだろうか。個人的には和太鼓の位置づけの変化からそのあたりをもう少し追及できないかと思案しているところである。

【参考文献】

梅津有希子 2016『ブラバン甲子園大研究』東京：文藝春秋社。
萩原秀三郎 1972『悪態祭』大塚民俗学会編『日本民俗事典』p. 6, 東京：弘文堂。
日本野球連盟 1990『都市対抗野球大会60年史』日本野球連盟、毎日新聞社。

にわのりお

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授。専門は、オセアニアの社会人類学、応援の比較研究。論文に「日本における応援組織の発展と現状——四年制大学応援団のデータ分析を中心とする試論」『国立民族学博物館研究報告』43(2): 189-268(2018年)、著書に『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』(石森大知共編 昭和堂 2013年)。



2016年に収集した高校野球に関する沖縄のローカル出版の一部(2019年、丹羽典生撮影)。